

図5



図6

と、向島になります。屏風の一番右端、墨堤に桜が美しく咲いている様子が見えます(図6)。江戸時代、墨堤は江戸府内の道灌山、感心寺、寛永寺などと並ぶ桜の名所でした。目図屏風にはいずれの場所にも着飾った女性たちや、弁当を携えて花見を楽しむ人々が描かれています。

これまで四回にわたつ

て、向島になります。屏風の一番右端、墨堤に桜が美しく咲いている様子が見えます(図6)。江戸時代、墨堤は江戸府内の道灌山、感心寺、寛永寺などと並ぶ桜の名所でした。目図屏風にはいずれの場所にも着飾った女性たちや、弁当を携えて花見を楽しむ人々が描かれています。これまで四回にわたつて、向島になります。屏風の一番右端、墨堤に桜が美しく咲いている様子が見えます(図6)。江戸時代、墨堤は江戸府内の道灌山、感心寺、寛永寺などと並ぶ桜の名所でした。目図屏風にはいずれの場所にも着飾った女性たちや、弁当を携えて花見を楽しむ人々が描かれています。

山は雪の量も多く、晩冬の景色だと思われ(図7)、次なる春の訪れを予感させます。そうして、また春になり、人々の営みが繰り返されるのです。永遠に続く季節の廻りに、江戸という都市の発展の連続という蕙斎の想いが込められているのかもしれない。文化六年という、江戸が中心となつて発展した文化が始まった頃であり、また、幕藩体制のほころびがあちこちに見え始めてきた時期でもあります。元浮世絵師であり、津山藩の御用絵師でもあつた蕙斎としては、そのどちらとも無関心ではられない状況だったのでないでしょうか。だからこそ、この時期に江戸の活気を写した目図を描いたのかも知れません。

屋が見えます。中村座市村座森田座の公許の三座を大芝居というのに対し、この地の芝居は小芝居と呼ばれ、大芝居より格の低いものとされており、小芝居の役者が大芝居の檜舞台を踏むことは決してなかったといわれていました。墨田川沿いには水茶屋の小屋が軒を連ねています。

様子にお気付きたと思います。両国で上を見ると思いますと、旧暦五月二十八日に花火が打ち上げられ、「玉屋」「鍵屋」と掛け声を上げる江戸の初夏の風物詩である川開きが思い起こされることでしょう。そう思つて東西の橋詰を再度見てみますと、料理屋の二階にいる人も、水茶屋で寛く人も、盛り場を行きかう人も上を見上げていようと思えます。また、隅田川の川面を見ると、屋形船や、屋根船、うる船がたくさん出ています。屋形船とは船の上に屋根付きの座敷を設けた船遊び用の船で、客のほか、芸者や幫面が乗り込み、座を盛り上げ、板前まで乗り込んで、そこで簡単な料理もできるよつになつていました。屋根船はそれより小型のもので、日除け程度の屋根が乗つていただけです。両者は屋形船の方がより大きく、また、屋根の上に乗頭が乗つて操船していることで区別が付きます。うる船というのは移動販売船で、屋根船や屋形船の間を縫うように移動しながら、食べ物などを販売していました。

最後に、この屏風に描かれている季節ですが、春夏秋冬のさまざまな景色が散りばめられ、「見るとバラバラの印象があります。しかし、じつと眺めていますと、ある規則性を持つていることに気が付きます。右から左、もしくは左から右や時計回りのよくなわたりやすいものではありませんが、確かに順番に並んでいるのです。それは南の江戸湾に見える白魚漁(早春)から始まり、向島墨堤、対岸の天王寺・道灌山の桜(春)で折り返して両国橋(初夏)に向かい、そこでまた折り返して九段坂(秋)にいたる。そこからまた折り返して江戸湾に出ます。海上に浮かぶ廻船が新酒番船だとすると、この季節は冬(十二月)ということになるでしょう。そして、最後に雪をかぶつた富士山に到達します。描かれた富士

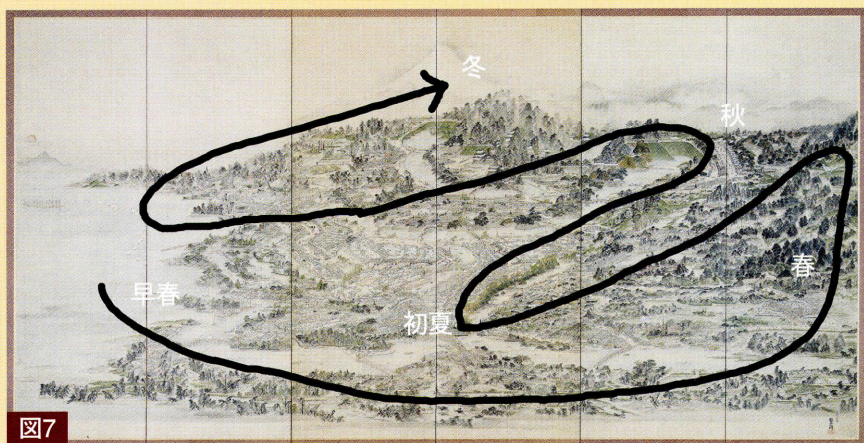


図7